

# 街の女マギー

ステイーブン・クレイン作

牧草 泉

一

一人の少年がラム横丁を死守するかのようにならず高く積まれた小石の山の上に立っている。彼はのしりわめいて悪がきたちに石を投げつけていた。悪がきたちは、デヴィル街からやってきたのだ。彼らも狂ったようにその小石の山を取り巻いて、少年に石を投げ返していた。

少年のあどけない顔は怒りで蒼白になっている。彼は体を震わせながら悪がきたちに罵声を浴びせていた。

「逃げるんだ、ジミー。奴らにやられるぞ」一緒にいた友人が後ずさりしながら叫んだ。

「いやだ」ジミーはオウム返しに叫ぶ「あいつらに負けたまるか」

デヴィル通りの悪がきたちが、またまた怒りのわめき声

着た囚人たちが列をなして出てきて、川岸をとぼとぼと歩いていくのが見えた。

小石がジミーの口に当たった。口元から血があふれ出て着古したシャツに染みていく。泥にまみれた頬に涙が糸のような溝をつくった。彼の細い足は震え、蔓のような小柄な体がよろめいた。けんかを始めたときは激しく悪態をついていたが、いまは愚痴っぽいつぶやきに変わっている。

デヴィル街の悪がきたちが、喜び勇んであげる雄叫びには残忍な勝利者の歌のようなリズムがある。彼らは相手の少年たちの血にまみれた顔を勝ち誇ったように見ている。

十六歳の若者が自分を誇示するように体を揺らしながら大通りをぶらぶら歩いて来た。彼の唇には大人になったかのような皮肉っぽい笑みが漂っている。帽子は目の上に覆うような被り方をしている。口にはタバコの吸い掛けを斜めにくわえ、周囲を威圧するかのようにならして歩いて来る。彼はふと空き地に目をやった。

そこではデヴィル街の悪がきたちが、ラム通りの少年たちを取り囲んで罵声を浴びせていた。彼らは泣きながらのしり返している。

「んっ！」若者は興味ありげにつぶやく「けんかしてるのか、よーし」

彼はデヴィル街の悪がきたちの方に歩いて行く。彼は肩を怒らせこぶしを振り上げている。それはあたかも勝者の

を上げた。右手に陣取っていた薄汚れた服を着た悪がきたちが小石の山に猛烈に攻撃を仕掛ける。悪がきたちの小さな顔は引きつって、暗殺者がせせら笑っているように見える。彼らは一斉に喚声を上げると、石を投げながら突進した。ラム横丁の勇敢な少年は反対側にまっさかさまに転がり落ちた。

彼が取っ組み合いをするうちに、コートはずたずたに引き裂かれ、帽子はどこかに飛んでいってしまった。彼は体のいたるところに打撲傷を負っていた。頭の切り傷から血が滴り落ちる。彼の青ざめた表情は狂気を帯び小悪魔の表情そのものだ。

道路ではデヴィル街の悪がきたちが少年たちを取り囲んでいる。彼らは腕で顔を防ぎながら激しく抵抗している。彼らは敏捷に動き回って、飛んでくる石を避けながら悪がきたちに向かつて石を投げ返す。そうして大声でのしり返していた。

ずんぐりした古い馬小屋の間からゆつと突き出たアパートが見える。その窓から一人の女がものめずらしげに身を乗り出して眺めている。数人の人夫が河のデッキで大型トラックを荷揚げしていたが、ちよつと手を休めて少年たちのけんかに目をやった。川岸では引き舟の操舵手が所在なげに手摺りに寄りかかって見つめている。

河向こうの島では、灰色の古いビルの陰から黄色い服を

ような素振りである。彼はデヴィル街の悪がきたちのなかで最もつこく相手方を詰っている少年の背後に近づいた。「何だ、このやろう」と言うなり、大声を上げている少年の後頭部を殴りつける。少年は地面に倒れると、かすれた声でものすごい唸り声を上げた。少年はよろよろと立ち上がると、とたんに若者の激しい剣幕に気がついて、大声でなにか喚きながら逃げて行く。デヴィル街の悪がきたちもすぐに彼の後を追って行った。彼らはちよつと離れたところに立ち止まると、不敵な笑いを浮かべている若者に向かつて一斉に罵声を浴びせかける。でも、若者は彼らには目もくれなかった。

「どうしたんだ？ ジミー」若者は、その少年に尋ねる。ジミーは血まみれの顔を服の袖でぬぐった。

「うん、あのね、ピート、うん！ 僕はあのライリーって奴を殴ろうとしたんだ。でも、あいつらが寄って集ってたかって僕を狙ってきたんだ」

ラム通りの少年たちが戻ってきた。彼らはまたデヴィル街の悪がきたちと、ちよつとの間ののしり合う。小石がいくつかが飛び交った。やがて、ラム通りの子供たちはいい争いをやめると自分たちの街の方に歩いて行く。

ラム通りの少年たちは、三々五々けんかの模様を語り始める。逃げた理由は、やや声高に誇張して話す。特にけんかしているときの状況は大げさに語られる。話はますます

エスカレートして、相手に向かって投げた小石はどれもこれも見事に命中したと言ひ張った。またまた勇氣は凛々として漲った。少年たちは一層盛んに自慢し始める。

「そうとも、俺たちはあの街の奴らを、みんなやつつけてやるさ」一人の少年が胸を張って言い放つ。

ジミーは切れた唇から流れ出る血を止めようとしている。彼は話しかけてくる相手を見ると睨みつけた。

「おい、俺は奴らと戦っていたんだぞ、お前は一体どこにいたんだ？」ジミーは言う。「お前たちは全く役に立たないんだから」

「なんだって？ うるさいね」その少年は向きになって答える。ジミーは相手を軽蔑したような表情で言った。

「何だ、お前たちはけんかもできないくせに、ブルー・ビリーよ！ お前、殴りつけるぞ」

「なにつ、いばりやがって」と、ビリーは言い返す。

「なんだって？」ジミーは脅すように言う。

「やるか？」ビリーが語気荒く抗弁する。

二人は殴りあい取っ組み合いをしながら石畳の地面に転がった。

「そいつを殴るんだ、ジミー、腹を蹴り上げるんだ」興奮したピートが、薄ら笑いをしながら叫ぶ。

つかみ合った二人は互いに叩き合い、蹴り上げ、引っかかり、服を引き裂いた。やがて二人は大声で泣き出して、相

手をのしる罵声も口から出なくなつた。見守っている他の少年たちは手を握り締め、気持ちが高揚して足を震わせている。彼らは二人を取り囲んで不安げに眺めていた。

すると、見物していた若者が急にあわてて叫んだ。

「よせ、ジミー、止めるんだ！ お前の父ちゃんが来るぞ」

子供たちはすぐにばらばらに散らばつて逃げた。彼らは後方に立ち止まり、何が起きるのかとびくびくしている。取っ組み合いの二人は四千年も前と同じやり方でまだけんかを続けている。だから、若者の声は聞こえなかつた。

一人の男が不機嫌な表情でとぼとぼとゆつくりと街路を歩いて来る。彼は弁当箱を手にしてりんごの木でできたパイプをくゆらせている。彼は、子供たちがけんかをしていた場所にやってくる、二人を物憂げに見つめた。やがて急に大声を出すと、取っ組み合いをして地面に転がっている二人のところに行つた。

「おい、ジミー、止める、すぐ起きるんだ。俺がぶつ飛ばしてやるからな。このガキめ」

彼は地面に転がって取っ組み合いをしている二人の間に割つて入ると、いやというほどビリーの靴で殴つた。ビリーは必死でもがいてジミーから逃れる。そうしてふらふらしながら後ずさりした。

ジミーは顔をしかめて地面から立ち上がった。そうして

父親に面と向かい合うと激しく父をなじり始める。父親はジミーを殴りつけた。

「家に帰るんだ、すぐに」そうして息つく間もなくまた言った「くどくどしゃべるな、こいつ、お前の頭を叩きのめすぞ」

父親と子供は言い争いを止めると歩き出した。父親は、リンゴの木でできたパイプを口にくわえて、ゆつくりと歩いていく。少年は十二フィートほど離れて父の後を歩いていく。彼は歩きながら盛んに父親をのしり続ける。

彼は、漠然と軍人になることを望んでいた。と同時にまた一種の崇高な放縦さを持つていた。だから彼にとつては父親に連れられて家に帰ることは、大変な屈辱だったのだ。

二.

やがて、父と子は薄暗いところに入つて行つた。そこには、傾きかけた建物があつて十数個のドアが見えた。子供たちは、いつもこれらのドアから町や水路へ遊びに出て行つていた。初夏の風が吹いて舗装された石畳から黄色い塵埃が巻き上がり、建物の窓に渦巻いたり叩きついたりした外に干した衣服が長い吹流しのように、非常階段の近くでゆれている。ただでさえ不便な場所なのに、所狭しとばかりにバケツや箒や古着やビンなどが放置されている。街では子供たちが互いに、一緒に遊んだり、けんかしたり、ま

た車道に繰り出すこともあつた。

どことなく癖の悪そうな女たちが、髪もすかずに普段着の姿で馬鹿話をしたり、一方では手摺りにもたれかかつて世間話をしたり、大喧嘩をして悲鳴を上げたりしている。生気のない人々が何かに威嚇されたような不安気な様子で奥まった箇所でパイプを啜って座っている。食べ物や料理しているのか、混ざつた匂いが街路に流れ込んでくる。建物は人が踏みつける重さで前後左右に揺れてぎぎぎと音を立てた。

古ぼけた服を着た少女が、一人の子供を人ごみの中へと引きずつていく。その子供は大声で喚き散らしている。いやいやするように皺だらけの裸足で踏ん張っている姿はまるで赤ん坊のようだ。姉である少女は大声で叫んだ。

「ほら、トミー、来るのよ。ジミーとお父さんが来るのよ。そんなに私を引っ張らないでよ」

彼女は彼の腕をいらししながら強く引つ張る。彼はうつぶせに倒れると泣き出した。彼女はまたぐいつと引つ張つて彼を起き上がらせると、二人は歩き始めた。それでも彼はかたくなに引つ張られて行くのを拒む。彼は必死で足を踏ん張つて抗つた。彼は姉をのしり、オレンジの皮を手に取るとかじりだした。彼はそれを幼い時に食べたことがあつた。怒つたような表情をした男が血だらけの少年を近くに連れてくると、少女は激しくのしり始めた。

「ねえ、ジミーあんたたち、またけんかしたの？」

その少年はさげすむような目で妹を見ると抗うように胸をそらす。

「なんだ、それがどうしたって言うんだ、マギー、ねえったら」

少女は彼を強く叱った。

「あんたたちは、けんかばかりしてるのね、ジミー、あなたが半殺しにあつて帰ってくるよ。お母さんが困るのよ、知ってるでしょ。お母さんを怒らせるのよ。そして私たちみんながお母さんから叩かれるのよ」

彼女は泣きはじめる。弟は首をうちぶつて身に降りかかる恐ろしさに気づいて泣き喚いた。

「ああ、どうにでもなれ！」ジミーは叫んだ「静かにするんだ、さもないとお前の顔をぶつたたくぞ、いいか？」

少女が悲嘆にくれていると、彼は急に大声でののしって彼女を叩いた。彼女は一瞬よろめいたが、すぐに立ち直ると泣きだした。そうして体を震わせて彼に罵声を浴びせながら、じわじわと後ずさりする。すると、彼がまた歩み寄つて彼女を殴る。父がそれを聞きとがめて振り向いた。

「止めるんだ、ジミー、聞いているのか？ 妹に手を出すんじゃない！ いじめちゃ駄目だ。おい、返事もできないのか？ お前のようなでくの坊に、何を言つても無駄なんだな」

と洗い始めた。ジミーは痛さに悲鳴を上げて、掴まれた肩を左右に振つて母親の逞しい腕から逃れようとした。

子供は床に座つてその様を見ている。彼の顔は事件に巻き込まれた女性の顔そっくりである。父親は新しくつめ替えたパイプを口にくわえて、ストーブの傍にある丸椅子にしゃがみこんでいる。でも、ジミーの泣き声を聞いていらいらしている。彼は振り返ると妻に大声で言った。

「そいつをしばらくそつとしておいてやるんだ。いいな、メアリー？ お前つていつもあいつを叩いているだろう？ 俺が帰つてきても夜はいつもゆつくりできないんだ。それつて、お前が子供を怒鳴り散らしているからなんだ。おい、分かるだろうな？ 子供をぶつちや駄目だ」

女は一気に子供へのお仕置きを厳しくすると、彼を部屋の片隅に押しやった。子供は全身から力が抜けたようになつて、ぶつぶつ訳の分からないことを言いがら泣きじやくつた。

女は自分の大きな太い手を自分のお尻に当てて首領のように大またで夫の方に歩いて行った。

「おや、」彼女は、夫をさげすむような表情で言った「なんだつて！ どうしてあんたは口出しをするんだね？」

子供はテーブルの下に這い入ると、振り返つておぼろげと見回した。ぼろを纏つた少女が後ずさりし、片隅にいた少年は用心深くばれないように足を伸ばす。

少年は父親に向かって声を荒げて反抗する。子供は大声で泣きじやくつて喚き散らした。少女があちこち動き回るので少年はそのたびに腕を引っ張られた。

しばらくして四人は一緒に、あのくすんだドアから建物に入つて行った。彼らは暗い階段を這うように上つて行き、ひんやりした薄暗い廊下を歩いていく。やがて父親が、目の前のドアを開けると、子供たちを明かりのついた部屋に招き入れた。

部屋の中では大柄な女性が忙しそうに行き来していた。彼女は沸き立っているストーブから平鍋を掛けているテーブルに行きかけて立ち止まった。父親と子供たちが入つてくると、彼女は彼らをじつと見た。

「えっ、どうしたの？ またけんかしちゃつたんだね、この子つたら！」

彼女はジミーをとつ掴む。ジミーは後ずさりして妹や弟の後ろに逃げようとする。二人がもつれ合つていると、そのはずみでトミーは突き飛ばされた。彼は大声を出して泣きじやくつた。二人の取っ組み合いのせいで、テーブルの足に柔らかいすねをぶち当てたのだ。

母親のがつしりした肩は怒りのために上下している。少年の首根つこと肩を掴んでうちぶる。ついに少年は悲鳴を上げた。彼女は彼をくすんだ流し台まで引きずつていき、布切れを水に浸すと、それで少年の傷ついた顔をこしこし

男はパイプを静かにくゆらしながら自分の大きなブーツをストーブの背後に寄せた。

「なに言つてんだ！」彼はぼそりと文句を言った。

女は大声を上げると夫の目の前でこぶしを振り回した。

ざらざらした黄色の顔と首が急に濃赤色に変わる。彼女はまた喚きだした。

彼はしばらく静かにパイプをくゆらせていたが、やがて立ち上がった窓から裏庭の暮れ行く混沌とした風景に目をやった。

「お前、一杯やつたな、メアリー」彼は言った「もう飲むの、止めた方がいいぞ。そうしないとあの世行きだぞ」

「何言つてるんだい。私はそう簡単にはくたばらないよ」

彼女は怒鳴るように応じた。二人は長々と口論し、互いに激しくののしりあつた。子供はテーブルの下からこっそりと見上げていた。彼の顔は興奮して左右に揺らいでいる。少女はそつと部屋の片隅に行く。そこでは少年が身を休めていた。

「怪我はひどいの、ジミー？」と、彼女はこわごわと尋ねた。

「どうつてことないよ！ ほら」少年は大声で答えた。

「その血を洗つてあげようか？」

「いいよ！」少年は答える。

「でも・・・」

「俺があのライリーをとつ捕まえたら、あいつの顔を叩き潰してやるんだ！ きつとね！ 見てなよな？」

彼は、時が来るのを待っているかのように、壁に体を向けた。両親の間のけんかでは母親が必ず勝利者である。男は帽子を手に取るど部屋から小走りで行った。明らかにその腹いせに酒を飲むためだった。彼女はドアの方に行くと彼に悪態をつく。夫はそれにお構いなしに階段を下りて行った。彼女は戻ってくるど部屋の中をあちこち歩き回るので、子供たちは泡のようにびくびくして体を揺らしていた。

「出てくるんだよ」彼女は大声で怒鳴る。そうして子供の頭の近くを履きふるした靴で、何度か足踏みをした。彼女は帷子を身につけながら、ストーブの湯気の中で息を吐いたり鼻を鳴らしたりした後、じゅーっと音を立てているジャガイモの入ったフライパンをストーブから降ろした。彼女はそれを振り回しながら、

「さあ、夕食だよ」彼女は急に大声で叫ぶ。「急ぐんだよ、なんでもしてあげるからさ」

子供たちはがたがたと音を立てながら急いで食卓に座った。子供はゆらゆらする子供椅子に足をぶらぶらさせて座ると腹一杯食べた。ジミーは、傷ついた唇をいたわりながら、フライポテトをせかせかと食べる。マギーは横取りされるのではないかと横目で見ながら、追われる小さな雌ト

ラのように、急いで食べた。

母親は子供たちをさりげなく見やった。彼女は子供をしっかりとつながらじやがいもを食べ、褐色のビンの酒を飲んだ。

しばらくすると彼女の心境が変わった。彼女は涙を流しながらトミーを隣の部屋に運んだ。彼はこぶしを握って眠っている。彼女は古く色あせた銘柄のキルトを二重にして彼に掛けてやった。やがて彼女はストーブの傍に戻ってくると、またうめくように涙を流した。

彼女は椅子を左右に揺らしながら泣き続ける。そうして、「あんたたちのお母さんってかわいそうな人なの」と、また「お父さんって人でなしなのよ」などと、二人の子供にささやきかける。

少女はテーブルと洗い桶の置いてある椅子の間をよろよろと歩く。たくさんの皿を抱えて歩くので小さな足がふらふらしていた。

ジミーはけんかで負った傷を手当しながら座っている。彼は母親をチラッと見る。彼の鋭い目は彼女がひそかに濃い霧のような悲しみから抜け出ているのを知る。母親の脳は酒の勢いで燃え立った。彼は息を潜めて座っていた。マギーが一枚の皿を落とした。母親が何かにせきたてられるように立ち上がる。

「どうしたのよ」彼女が怒鳴る。

彼女は怒りの眼差しで子供を睨みつけている。赤く燃え盛る顔がしだいに紫色になる。少年はホールに走って逃れた。そうしてハトが地震にあったときのよう悲鳴をあげた。彼は暗闇の中でうろろしていたが、ついに階段を見つけた。しかし、彼は気がせいいてつまずくと下の階まで転げ落ちた。一人の老女がドアを開けた。彼女の背後の明かりが少年の震える顔に当たった。

「おや、この子ったら、こんな時間にどうしたの？ お父さんがお母さんをぶったの？ もしやお母さんがお父さんをぶったのかい？」

(未完)